

<エッセイ>

言葉の稜線で宇宙を眺める

Tracing the Word Ridge, Gazing into the Space

井上榛香

Haruka Inoue

『宇宙を編む』という本を書いた。これは、幼少期に宇宙に興味を持った私が、ウクライナ留学を経て宇宙ライターになり、取材で各地を巡り、さまざまな人と出会い、感じたことを書き留めたエッセイだ。ロケットの打ち上げを間近で見たときの感動だとか、打上げを特等席で取材できる千載一遇のチャンスを掴んだのに上手く写真に収められなかったときの悔しさ、衛星データで戦争の被害を受けたウクライナの街を見たときの憤りと葛藤だとか、これまでの体験をめいっぱい詰め込んだ。

本は面白い。言葉の銀河から選び取った一言を重ね、物語を編んでいく作業そのものが、時間を忘れるほど楽しかった。そして、それを誰かに読んでもらう体験は、さらに面白い。印刷されて、書店や図書館に並ぶと、これまで一度も顔を合わせたことのない誰かが、ページをめくりながら私の体験を追いかけてくれるのだ。「著書でこんなことを書いていましたよね」と声をかけられたとき、私は「そんなことを考えていた日もあったな」と思う。書いていた当時は、綴った体験が自分の全てだと確かに思っていたはずなのに、今となっては、不思議と取るに足らないものに思えてしまうのだ。はじめはそういう心境の変化に戸惑ったけれど、悪いことではない。むしろ爽やかな気持ちだ。思い出を手放して身軽になった今、次の山を登ろうと思っている。

次の山は少しずつだが、見えてきている。少し生々しい話をする、本を出版すると印税が入る。この資金を何に使おうかと考えたとき、最初に思い浮かんだのは、航空機で放物線を描くように飛行し、その機内で微小重力環境を生み出して体験できるパラボリックフライトだった。著書ではパラボリックフライトの経験者から聞いた感想を紹介している。重力から解放され、ぷかぷかと宙を舞うのはどんな感覚なのだろう。興味が湧くし、宇宙ライターを名乗るからには、一度くらいは微小重力環境を体験しておいたほうがいいのではないかと思った。二番目に思い浮かんだのが大学院への進学だった。奇しくも、宙に舞うか、地に足をつけるか、全く違う二択だ。少し迷って、進学を選んだ。

私は学部時代にウクライナの首都キーウへ留学して国際法を学んでいた。日本で一定期間働いた後、再びキーウに戻って修士号を取得したいと考えていた。というのも、ウクライナで親しくなっ

た大学院生のなかには、働きながら、あるいは仕事を休職して学んでいる人が多くいて、彼らの姿を見ているうちに、社会人としての経験があることで、社会の出来事や課題をより深く理解できるようになるのではないかと思ったからだ。キーウのパステルカラーの街並みが気に入っていたし、出会うのはやさしい人ばかりで居心地もよかった。

しかし、2022年にロシアによる全面的なウクライナ侵攻が始まり、留学は難しくなってしまった。さらに、留学のために貯めていたお金は、ウクライナに住んでいた友人たちを日本に避難させるために使ってしまった。こういう事情で進学は諦めていたが、宇宙ライターとして記事を執筆する仕事の延長線上で、論文の寄稿依頼もいただくようになり、大学に戻って、研究のお作法を身に着けたり、何か一つのテーマを深く研究したりして専門性を身に着ける必要性を感じていた。戦争によって困難が生じて、めげずにどうにかやりたいことを叶えることは、ささやかな抵抗でもある。思い立ったが吉日。執筆作業と並行して出願に必要な書類を集め、校了の2日後に願書を提出した。慌ただしい受験だったが、無事に合格通知を受け取り、この春、大学院に進学した。

執筆や取材活動を止めるわけにはいかないため、社会人大学院生として、働きながら大学院に通うことにした。専門は学部時代から転向し、科学技術イノベーション政策にした。進学先はデータサイエンス教育に力を入れていて、学内では基礎から応用まで豊富な授業が開講されている。これまでは取材で得た情報を定性的に分析することしかできなかったが、宇宙開発や宇宙政策の動向を定量的に分析してみたいと思っている。早速、春学期の授業でデータサイエンスをかじってみると、これまでの取材では見過ごしていた技術やビジネスの微細な変化や分かれ道が、数字というレンズを通して浮かび上がってくるように感じられた。新しい望遠鏡を手に入れたようで、学ぶことが楽しい。

けれど、大学院に進学してみて、自分の足りなさにも気づかされる。科学技術を考えるとき、自分は宇宙開発のことしか知らず、近接する分野については何もわかっていなかったのだ。レポート課題で宇宙以外がテーマになると、何を書いていいのかわからなくなってしまう。それどころか、論文を読むのにも人一倍時間がかかり、きちんと理解できているかどうか自信が持てない。自分は「宇宙」という下駄を履いていたのだと思う。だからこそ、大学では思いきってその下駄を脱ぎ、初心に戻って、あらゆることを一から学び直したいと思っている。

そして、チャンスがあれば、大学での授業や研究を通じて得たことを生かして、新しい本も書いてみたい。このエッセイが、その次回作のプロローグになったらいいと思っている。